

メタファーで学ぶ発想の違い—認知言語学の観点から—

Different Cultures Construct Different Metaphors — From a Cognitive Linguistics Perspective

TANIMURA, Midori

Kyoto University of Foreign Studies

NAKAMOTO, Koichiro

Kyoto University of Education

Abstract

Metaphor is a way to understand one thing in terms of another (Lakoff & Johnson, 1980). For example, when English speakers say “we still have a long way to go,” they understand life as a journey: LIFE IS A JOURNEY. Since English speakers use metaphorical expressions in everyday speech, although they may not be aware of them, learning this figurative discourse may allow English learners to gain a deep understanding of English. The purpose of this study is to report how English learners raise their metaphorical awareness in a classroom context, using the principles developed in cognitive linguistics. The participants were 27 Japanese English learners who took part in this research project as part of their course requirements. They were instructed to collect many examples of metaphor in everyday language from videos which they chose, and to categorize all the collected expressions both in English and their Japanese translation based on the 14 paradigms (e.g. IDEAS ARE FOOD; THINKING IS MOVING etc.). The results suggest that the learners’ awareness of metaphor in both languages was enhanced through writing papers. They also become aware that different cultures construct different metaphors. We suggest that metaphorical awareness helps the learners promote cross-cultural understanding.

Key Words

メタファー 発想の違い 認知言語学 異文化理解 授業研究

1 はじめに

本稿は、異文化理解を主眼に据えた英語授業の実践報告である。具体的には、メタファー表現をとおして学習者に日英語の発想の違いを観察させ、その文化的な差異を意識化させることを目標にした。異文化理解とは一般に、実体験に基づく学習に限定されることが多いが、今回はそれを広くとり、間接的にであれ異なる言語を使う人々の世界の捉え方を理解していく過程をも含める。

実際の授業では、前半で学習者に認知意味論のいう「概念メタファー」を具体例とともに学習させた。後半では学習者に英語の映画を選ばせ、台詞に出てくるメタファー表現を採集・分析させた。その際、英語の台詞だけでなく日本語の翻訳にも注目させ、日英語の表現の違いに触れさせた。本稿は、こういった授業のなかで学習者が日英語話者の世界の捉え方をどのように発見し、その文化的な差異に気づいていったかを報告する。

以下、簡単に本稿の概略を述べる。まず、第2節で認知言語学のメタファー理論を概観し、第3節で授業活動の具体的な方法を提示する。次に、第4節で学生が調査したメタファー表現の分析結果を報告し、最後に第5節で本稿の結論を述べる。

2 メタファー理論

従来の伝統的な枠組みでは、メタファーとは才能のある一部の文筆家が用いる修辭的な技法と考えられてきた。これに対して、Lakoff & Johnson (1980) ではメタファーとは人間の言語や思考を根底で支えるものであり、日常言語のあらゆる概念の基盤にあるものとされる¹。例えば、ここで用いた“支える”という表現ももともとは建築の言語で、〈理論は建物である〉といった比喩としてよく用いられる。例えば、**This theory quickly collapsed.** (この理論はもろくも崩れ去った)、**It is difficult to construct a theory.** (理論の構築は困難である)、**This theory is full of holes.** (この理論は穴だらけだ) といった表現の背後にあるのは理論をまるで建造物のようにみなすというメタファーである。このように認知意味論のいうメタファーとはひとが抽象的な状況を理解するときに用いる理解の枠組みとっていいだろう。もうすこし具体的な事例から観察してみよう。

ここでは初期の理論を参考に四種類のメタファーについて見てみたい。

第一に、方向づけのメタファーと呼ばれる現象がある。これは人間が周囲の状況を上下・前後・内外・中心-周辺といった空間的な概念を用いて理解することをいう。例えば、**I'm feeling up/down today.** のように、幸せな感情は上 (UP) として、悲しい感情は下 (DOWN) として概念化される傾向がある。また、**The secret leaked out.** や **He kept the issue in the dark.** のような場合も主体にとって見える領域は容器の外に現れたもの、見えない領域は容器の中に隠れたものとして理解されている。

第二に、感覚から認識へというメタファーを見てみよう。これはより低次の感覚がより高次の感覚や、さらに、感覚や知覚の表現が認識の領域の概念に用いられることをいう。例えば、**sharp voice** (鋭い悲鳴) や **warm color** (暖かい色) というとき、より低次の触覚の言葉で聴覚や視覚など高次の感覚が述べられている。また、**I can't see what you mean.** という場合、「見る」という知覚表現で「わかる」といった認識のレベルの内容が語られている。

第三に、存在論的メタファーという現象を見てみよう。これは行為や出来事、感情や考え、時間など実際には目に見えない対象をまるで目の前にあるモノのように表現することをいう。例えば、**That mistake costs me a lot of time; we have no more time to spend.** という場合は時間はお金として概念化されており、**We cannot swallow his idea; it smells fishy.** の場合はアイデアは食べ物のようにみなされている。また、**Inflation robbed her of a lot of pension.** といった場合もインフレは強盗としてかたられている。

最後がそれ以外の狭義の概念メタファーである。これはある領域の経験を語るときにそれとはべつの具体的な領域の概念を“体系的に”用いることをいう。例えば、**LIFE IS A JOURNEY** という概念メタファーの場合、旅の主人公を旅行者とすると、援助者は旅のガイドに (e.g. **You are the shepherd of my life.**)、人生の選択は方向に (e.g. **We are at the crossroad.**)、人生の目的は到達地に (e.g. **Where are we heading for?**)、また人生のなかで出会う困難は障害物 (e.g. **It's been a long, bumpy road.**) といったかたちで、人生のあらゆる

¹ 日本語の言語現象も含めた比喩理解の全体像に関しては山梨 (1988) を参照。

局面が旅の言語を用いて体系的に喩えられる。

なお、最後にひとつ付け加えておくと、ある意味ですべてのメタファーは狭義の概念メタファーとなりうるわけで、先に述べた TIME IS MONEY や IDEAS ARE FOOD といったメタファーもお金や食べ物に関する領域の概念が体系的に用いられる場合、これらは狭義の概念メタファーとなる。われわれの日常的な認識の届く範囲はこのレベルの概念メタファーであり、学生たちの採集したメタファーを見ても、こういった体系化された概念メタファーからの引用が多いことに気づく。現在のメタファー論では、こういった狭義の概念メタファーに対して前者三つのメタファーはより根源的という意味でプライマリー・メタファーと呼ばれている (Lakoff & Johnson, 1999, p. 49)。

以上、認知意味論で提案されたメタファーを概観したが、これらのメタファーのなかには文化や言語に依存しない普遍的なメタファーもあれば、ある文化や言語に特化したメタファーといったものもある。身体的な図式に関する上下や容器のメタファーは基本的に普遍的なものとして用いられるが、概念メタファーや存在論的メタファーは文化的な影響を受ける傾向がある。

例えば、人生に関する概念メタファーのなかで、LIFE IS A JOURNEY や A LIFETIME IS A DAY といったものはおそらく普遍的に理解されるであろうが、LIFE IS A GAME や LIFE IS THEATER, LIFE IS SPORTS になると、その社会や文化でどんなゲームやスポーツ、劇が盛んであるかといった文化的な影響を受ける。例えば、米国ではスポーツといえば野球であり、野球をもとにしたメタファーが数多く用いられる。

また、存在論的なメタファーも文化的な影響を受ける傾向にある。これは意外な感じがするかもしれないが、英語のほうが日本語よりも存在論的なメタファーが発達している。例えば、The war destroyed the entire city. (戦争で町がすべて破壊された) といった表現は英語では自然であるが、これを日本語に直訳するとかなり奇妙である。これは日本の英語学において古くから無生物主語や名詞構文といった現象として議論されてきた問題につながる (江川, 1991, p. 25)。

このあたりの現象をいかに分析するかは現在の認知言語学のなかでもまだ定説がない。しかし、これは英語の発想と日本語の発想の根幹に関わる点であり、今後メタファー論との関連も含めこれらの現象がまとめられることが期待されている。

現時点でいうならば、この点を最も体系的に議論したのは池上の『「する」と「なる」の言語学』であろう (池上, 1981)。池上によると、英語はまず行為者を確定し、それがどのような事象をもたらしただかといった「する」の論理で表現するのに対して、日本語は出来事を自然の成り行きの中かで移り変わるといった「なる」の論理で語る傾向があるというものである⁴。

このように考えると、無生物主語や名詞構文といった現象もこういった事態の概念化のしかたの現われとして説明される。「戦争が町全体を破壊した」といった表現が日本語で不自然に響くのは戦争をまるで行為者として語る「する」言語の発想が日本語になじまないからであるといえる。こういった言語の対立をメタファー論として展開するならば、英語は周囲で起こる出来事を〈人間の行為〉に写像するのに対して、日本語はそれを〈自然の推移〉に写像する傾向があるとしてまとめられるかもしれない。

以上、言語表現はメタファーをもとに構造化されていること、そして、そのメタファー

⁴ 同様に、日英語の発想の違いに言及した興味深い論考として Hinds (1986)、池上 (2006) がある。

は言語普遍的なものばかりでなく、社会や文化の影響を受けて構成されていることを見てきた。こういった言語と文化の関係は言語学で“言語は思考を反映する（さらに、思考は言語によって形成される）という仮説となっており（サピア・ウォーフの仮説）、最近のメタファー研究ではこの仮説を検証する試みも始まっている（Kövecses, 2005）。

こういった仮説がどの程度まで信頼できるかは今後の課題であるが、少なくとも言語には文化的なものの捉え方が反映されていることは確かであろう。今回の試みは英語のメタファーを通して学習者が文化的な思考パターンに気づき、できれば英語圏の異文化のものの見方を身につけること、また、英語圏の発想とともに自文化のものの見方をも考えるきっかけとすることを目標に据えた。

3 授業活動

この節では、上記に挙げた目標を達成すべくどのように授業を展開したか、また、学生がどのように日英語話者の世界の捉え方の違いに気づくに至ったかについて述べる。

3.1 調査参加者

参加者は関西にある大学の4年生27名である。学生は必修科目に用意されている講義のなかから各自の希望を決め履修し、4年間の英語学習の総仕上げとして担当者が指定した分野内で学生個人が決定したテーマについて、英文エッセイ（5から10ページ）を書き上げることが要求される。参考に講義概要を以下に挙げる。

講義概要：

「恋に落ちる」を“fall in love”と翻訳することが多いですが、「穴」に落ちることはあっても、文字通り「恋/love」に落ちることはありません。朝食によくでてくる「目玉焼き」“sunny-side up eggs”も、「本当の目玉をフライパンで焼いたもの」を指してはいません。日本語では黄身が「目玉」に、英語では黄身が「太陽」に“見立て”られているわけです。このような見立てをメタファーといいます。これらの例から分かるように、メタファーは、文学作品にでてくるような特別な表現ではなく、言語活動から思考や行動にいたるまで、私たちの毎日の生活に深く浸透しています。本授業では、このようなメタファーのとらえ方から、英語の語彙や表現を支えている考え方、英語話者が当たり前のように受け入れている世界のとらえ方について学習し、普段私たちが何気なく使っている言葉の成り立ちや、理解の仕方について学びます。

3.2 教材

授業で使用した教材は *Speaking metaphorically* である。これは Lakoff and Johnson (1980) のメタファー論に基づいて書かれたエッセイで、各課に異なる概念メタファーが取り上げられている（付録1参照）。上記に挙げた4種類の分類との関係から述べると、方向づけのメタファーには、Chap. 3 の TIME IS SPACE と STATES ARE LOCATION, Chap. 11 の A ZONE OF INTERACTION といったものがこのカテゴリーに分類される。感覚から認識へというメタファーには、Chap. 2 の THINKING IS MOVING や Chap. 4 の KNOWING IS SEEINGS, Chap. 5 の SEEING IS TOUCHING といったものが、存在論的メタファーには、Chap. 1 の TIME IS MONEY や Chap.9 の IDEAS ARE OBJECT, Chap. 10 の IDEAS ARE

FOOD といったものが、狭義の概念メタファーには、Chap. 6 の LIFE IS A JOURNEY や Chap. 8 の LOVE IS A JOURNEY, Chap 14. の MORALITY IS ACCOUNTING といったメタファーが分類される。

3.3 授業の進め方

授業では前期から後期の半ばにかけて教材に沿って毎回異なる概念メタファーを学習させた。その後、いくつかのテキスト（例えば、Martin Luther King によるスピーチ “I have a dream” の書きおこしなど）からメタファー表現を探し課題をおこなった（タスク 1）。その際、学習者には概念メタファーに基づく表現を分類させ、背後にある見立てを記述するよう指示したⁱⁱⁱ。後期の後半からは学習者に日英語の発想の違いに焦点をあてた英文エッセイを書くように指示した（タスク 2）。

3.4 タスク

タスク 1 では英語の言語形式への気づき (awareness) をうながし (Schmidt, 1990, 1995; Robinson, 1995 など), 普段何気なく使っていることばの仕組みを理解させた。その際、タスクを通してことばについて学ぶことの楽しさが感じられるような学習を目指した。

以下はその例で (表 1 参照), 学習者には次のように指示した。まず概念メタファーに基づく表現に下線を入れること, 次にどの概念メタファーが使用されているかを同定すること, 最後にそれらがどのように理解されるかを説明することを求めた。また, このとき各自で書き出したメタファーを持ち寄って話し合わせ, 情報を共有しあうことで自分では気づかなかったメタファー表現についても学習させた。

スピーチの書き起こしの一部：

I say to you today my friends - so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: “We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal.”

表 1 分類例

表現	概念メタファー	理解の仕方
face the difficulties	LIFE IS A JOURNEY	「旅で出会う障害」を「人生における障害」と見立てる
have a dream	IDEAS ARE OBJECTS	「夢」を「具象物」と見立てる
a dream rooted	IDEAS ARE PLANTS	「夢」を「植物」と見立てる
nation rise up	NATION IS A PERSON	「国家」を「人」と見立てる
nation live out	NATION IS A PERSON	「国家」を「人」と見立てる

タスク 2 では, 各自が選んだ映画のせりふ (英語とその日本語訳)^{iv}から, 20 個のメタファー表現を抽出・分類し, 日英語の発想の違いに焦点をあてて分析させた。その際, 日英語ともに同じ概念メタファーに基づく表現, 日英語どちらかのみ概念メタファーに基づく

ⁱⁱⁱ 書き方は瀬戸 (1995) を参考にした。

表現，日英語で異なる概念メタファーに基づく表現に分類するよう指示を出した。また，日本語で，この課題を通して学んだこと，思ったこともあわせて記述するように指示した。

4 結果

以下に，タスク2の結果を学生の感想（4.1），メタファーの分類（4.2），学生が学んだこと（4.3）の順に述べる。

4.1 学生の感想の分類

学生の感想を大きくまとめると，以下の5つのタイプに分類される。

① 学習に対する自己変容

- ・最初は難しくてなかなか理解できずに苦闘したが，だんだん理解できてきて楽しくなった。
- ・抽象的な概念を具体的な事物に置き換えて考えるということが雲をつかむようで，理解に苦しんだ。私は言葉を言葉としか考えておらず，それに何の疑問も持たずに生きてきた。この授業の機会がなければ，一生そうしていただろう。このレポートをすることによって理解に苦しんだメタファーの面白さを理解できたように思う。
- ・メタファーという存在すら知らなくて，最初の頃は何が何なのか全く理解できなかった。しかしこの一年を通してメタファー表現が身近に溢れていて，世界をより理解しやすくするための方法であることを学んだ。
- ・理解しているつもりでも実際に自力で探そうとすると難しく，それだけ私たちの生活の中で気づかずに自然にメタファーを使っている，私たちの生活に溶けこんでいるのだということが分かった。

② 発見・気づき

- ・日常生活で，こんなにも多くのメタファーを無意識に使っていたことに驚いた。
- ・「作戦を盗む」などの表現を見ても，なにも不思議と感じていなかったが，あらためて考えてみるととても面白い表現だと思った。
- ・メタファーと思われる表現が出てきても，それは学んだメタファーのどれにも当たらない場合が多かった。
- ・メタファーには色々な種類があるが，どれも抽象的なものをより具体的なものに置き換えるという概念は同じで，そこに，人間が物事をわかりやすくするために勝手に頭の中でそのような操作をしているという事実があり，大変面白みを感じた。
- ・誰から教えられたわけでもなく，メタファーを理解する能力を持っている自分，人間ってすごいなあと思った。
- ・メタファーは完全に人間だけによって生み出された表現なので，だからこそ人間の見えない部分をよく映してくれるものではないかと思った。

^{iv} 学生が分析に使用した映画: Aladdin, Alice In Wonderland, Bridget Jones's Diary, Catch Me If You Can, Chocolat, City of Angels, Down With Love, Eternal Sunshine of the Spotless Mind, Finding Nemo, Home Alone, In Her Shoes, Kate & Leopold, Legally Blonde 2, Lion King, McQ, Mission Impossible, Mr. & Mrs. Smith, Pirates of the Caribbean, Romeo and Juliet, Shrek, Sleeping Beauty, The Howl's Moving Castle, The Matrix, The Nightmare Before Christmas, The Notebook, The Sweetest Thing, There's Something About Mary, What Women Want, Working Girl

③ 表現における相違点と共通点

- ・日本語にない英語ならではのメタファー表現, 例えば, “Never burn bridge” 「後々のことを考えておくのよ」を知ることは, 新しい世界を知ったようですごく新鮮だった。
- ・言葉は違っていても, 物に対する概念は共通だということに感動した。
- ・英語でも日本語でもメタファーが言語に根付いているということに面白さを感じた。
- ・人が感じる思いや感覚は国境を越えて同じなのだと思う。
- ・夢中であることを, 目がくつつくという考え方を元に “take one’s eyes off” 「目が離せない」と表現することには驚かされた。言語が異なっているにもかかわらず, 目がくつつくだなんていうとっぴな考え方が共通しているのは大変面白いことであると思った。

④ 英語の勉強

- ・英語と日本語とでは似ていても完全にメタファーが一致することは少なかったので, あらためて日本人が英語を話す難しさを思い知らされた。
- ・様々なメタファーを学んで, 英語についてだけではなく生まれて初めて日本語についても考えた。
- ・一番研究したかった前置詞について調べることができ, 中学校で習ったときは, ただ単に前置詞の意味を覚えるだけだったが, 今はイメージで捉えることができるようになった。
- ・in, up, out など何気なく使っていた単語だが, 一つ一つ使われ方を見ていくと, 言葉の向こう側に伝えたい思いまでもが理解できる。
- ・人気のあるスポーツから言葉を引っ張ってきて普通に会話の中で使っているなんてとても洒落ていると思う。
- ・メタファーが何なのか知らなくても生きていく上で支障はないが, 言葉の表現の豊かさを知り, 自分自身の言葉や表現も豊かにすることができると思う。
- ・メタファーを使った英語の表現をたくさん学び, コミュニケーションを取る際に活用できればいいと思った。
- ・いつから今のように多くのゲーム用語が日常会話で使われるようになったのか, その成り立ちが気になった。

⑤ 異文化理解

- ・他国の言語を話すためには, その国の文化もしっかりと学ぶ必要があることも, メタファーの勉強を通して気がついた。
- ・メタファーはこんなにも日常生活で頻繁に使われているのに, 今まで注目したことはなかった。一つ一つに目を向けるととても奥が深く, 言語と文化と人間の強い結びつきを再認識した。
- ・日本語と英語では同じ意味だけど違うメタファーを使っていて, そのメタファーを見ればそれぞれの国の文化も理解できるという発見が今回の課題の中で一番興味深かった。
- ・野球の表現が野球文化の盛んなアメリカで多くみられるように, その国独自の文化もメタファーにはかなり反映されているということを実感した。

以上の感想から, 学習者がメタファーを理解するまでにかなりの時間を要したこと, し

かし同時に格闘しながらも、達成感を持って課題を成し遂げたことが読み取れる。また、英語の表現の単なる採集だけでなく、その基底にある概念メタファーの存在から、人間とはなにかといった問題にまで考察を進めるといった成長を遂げていることも読み取れる。

また、学生のなかには日英語の表現比較を通して、言語に国境を越えた共通性がみられることに気づいた者もいた。巻下・瀬戸 (1997, p.99) は、まなごしが同じであるとき、ある種のメタファーは日英語間で緊密な対応をなすと述べており、このタスクが日英語の相違点だけでなく共通点の学習にも役立っていることがわかる。さらに、メタファーを言葉の意味を規定する根源的なものと理解し、体系的な学習の必要性に気づき、また、様々な表現や語源、日本語に対しても興味を持つようになったことなどは注目するに値する。言語表現と文化との密接な関係に気づいた学生も多くいたことも興味深い。

4.2 14 のメタファー^v

学生のレポートから、各概念メタファーの例を挙げる。

1 TIME IS MONEY

- ・ You are *wasting* my time. 時間の無駄だ。(Finding Nemo)
- ・ So we don't *waste* our time. そうすれば俺たちは時間を無駄にしなくてすむ。(The Sweetest Thing)

2 THINKING IS MOVING

- ・ We could *go over* some wedding details. 結婚式の相談もある。(Legacy Blonde 2)
- ・ I hadn't *got over* you. 僕が君を引きずっているのに気づいたんだ。(Bridget's Johnes's Diary)

3 TIME IS SPACE/STATES ARE LOCATIONS

- ・ Oh, if I hurry back I might even be home *in* time for tea! 急げばお茶の時間に間に合うかもしれない。(Alice in Wonderland)
- ・ We could get *in* big trouble. なにか悪いことがおきそうだ。(The Lion King)

4 KNOWING IS SEEING

- ・ Let me get this straight. 話が見えない。(The Lion King)
- ・ Why can't you *see* I love you? 分かるでしょう。愛しているの。(Bridget Johnes's Diary)

5 SEEING IS TOUCHING

- ・ *Eye on* the package. 標的から目を離すな。(Catch Me If You Can)
- ・ I could not *take my eyes off* you. 君から目が離せなかった。(In Her Shoes)

6 LIFE IS A JOURNEY

- ・ So whenever you feel alone, just remember that those kings will always be there to *guide* you

^v 学生は 20 種類のメタファーを学習したが (付録 1 参照), 新聞記事などに出現しやすい Chap. 16 から Chap. 20 のメタファーは省いた。また, Chap. 3 の STATES ARE LOCATIONS と Chap. 11 の A ZONE OF INTERACTION は概念的に似通っているため今回は同じものとして扱った。

お前が独りになったときは王たちが空から導いてくれるだろう。(The Lion King)

- ・ That's not gonna work, Scar. I've *put it behind* me. その手には乗らないぞ。過去は乗り越えた。(The Lion King)

7 A LIFETIME IS A DAY

- ・ We shall rise to greet the *dawning* of a new era. 新しい時代の夜明けに向けて突き進むのだ。(The Lion King)
- ・ One day Simba the sun will *set* on my time here and will *rise* with you as a the new king. やがて私の時代にも終わりが訪れ、お前が王国を引き継ぐ。(The Lion King)

8 LIFE IS A GAME

- ・ This is the last time I can help you. *Four strikes, you're out.* 面倒を見てあげられるのはこれが最後よ、4回目はアウトよ。(Working Girl)
- ・ *the players* may have changed, but *the game* remains the same, and the name of *the game* is "Let's make a deal" 皆さん、選手は交代しましたが、試合は続行です。肝心なのは“取引をまとめること”です。(Working Girl)

9 IDEAS ARE OBJECTS / COMMUNICATION IS SENDING

- ・ *Curiosity killed* the cat. 好奇心は命取り。(The Nightmare Before Christmas)
- ・ You *have another idea.* アイデアがあるの。(Working Girl)

10 IDEAS ARE FOOD

- ・ This *stinks.* これはにおうぜ。(The Lion king)
- ・ Meticulous planning 練りに練って。(The Lion king)

11 LOVE IS A JOURNEY

- ・ He *dumped* me Kevin *dumped* me. 捨てられたの、ケヴィンが私を捨てたのよ。(Sweetest Thing)
- ・ Here, oh, here will I *set up* my ever lasting *rest.* 僕も君と一緒に永遠の眠りに入る。(Romeo and Juliet)

12 LOVE IS MAGIC/LOVE IS MADNESS

- ・ I was *blind* with you. 君に一目ぼれしたんだ。(The Notebook)
- ・ I'm *crazy* about you. 君に夢中なんだ。(The Notebook)

13 MORALITY IS ACCOUNTING

- ・ And now she repays me *repays* my kindness by walking out on me? 飼い犬に手をかまれたも同然だ。(Chocolat)

14 ANGER IS FIRE

- ・ Gee. Will Kosterman *get hot.* 課長が怒るぞ。(McQ)
- ・ Now they're in for it. 怒りに火がついちまったぞ。(The Lion King)

15 その他（英語と日本語で異なるメタファー）

- ・ *Keep your temper* がかかさないで。(Alice in wonderland) (英語: IDEAS ARE FOOD, 日本語 ANGER IS FIRE)

上記の例のように、学生は映画からメタファー表現を抽出するように指示されていたが、概念メタファーによって次のように抽出の頻度が異なることがわかる（表2参照）。これらの原因としては以下のような可能性が考えられる。

まず最も多く抽出されたのは STATES ARE LOCATIONS という方向づけのメタファーであった。おそらくこの種のメタファーは日英語の差を越えて言語の基盤にあり、日常言語に頻出するためであろう。次に IDEAS ARE OBJECTS や LIFE IS A JOURNEY という概念メタファーが多く取り上げられている。これらは概念メタファーのなかで最も体系化されたメタファーであり学生もそういった表現に気づきやすかったと考えられる。

また、LOVE IS MAGIC, LOVE IS MADNESS, LOVE IS A JOURNEY など愛に関するメタファーが多いのに対し、TIME IS MONEY や MORALITY IS ACCOUNTING, ANGER IS FIRE といったメタファーが少ないことも注目値する。これは学生が選んだ映画のジャンルに偏りがあり、愛や人生をテーマにしたドラマ映画が多かったということが影響しているものと思われる。

表2 抽出されたメタファーの種類

概念メタファー	述べ数	概念メタファー	述べ数
STATES ARE LOCATIONS	16	A LIFETIME IS A DAY	4
IDEAS ARE OBJECTS / COMMUNICATION IS SENDING	12	LOVE IS A JOURNEY	3
LIFE IS A JOURNEY	11	IDEAS ARE FOOD	3
KNOWING IS SEEING	8	ANGER IS FIRE	2
LOVE IS MAGIC/ LOVE IS MADNESS	7	TIME IS MONEY	1
SEEING IS TOUCHING	6	THIKING IS MOVING	1
LIFE IS A GAME	6	MORALITY IS ACCOUNTING	1

4.3 学生が学んだこと

このタスクを通して学生が学んだことをまとめると以下のようなになる。

- (1) 日常言語の基底に概念メタファーがある
- (2) 文化に固有の概念メタファーと普遍的な概念メタファーがある
- (3) 多くの概念メタファーは体系的である
- (4) 日本語の発想と英語の発想の根底には共通点と相違点がある

さらに、付随的には、日英語の表現の豊かさ、言葉の面白さや日本語への興味、思考力・観察力・分析力も学習したと考えられる。

このように学生はメタファーを通して日英語の発想の違いを観察・分析することで、異文化や自文化について学習しただけでなく、異文化理解の学習過程で結果的に英語の技能も身につけたと思われる。

5 結論

本稿はメタファーを利用した異文化学習の可能性とその実践について報告した。最後に今回の研究は堀（2006a, b）のポライトネスをとおした英語教育の報告に強い影響を受けていることを指摘しておきたい。堀は Brown & Levinson（1978）のポライトネス理論に依拠し、英語表現をポライトネスの観点から分析することで日英語の言語行動の違いに気づかせるという試みであった。筆者らはこういったアプローチはポライトネス以外にも広く言語の多様な側面に着目させることで拡張できると考え、今回はメタファー表現から日英語の発想の違いを意識させることを試みた。

こういった方法論は他にもジェンダーによって雑誌や広告に現れた文化的差異に気づかせる、ナラティブの構造によって民話や物語、さらにアカデミックな文章を分析するといった応用の可能性が開かれている。そういった意味で今回の実践は異文化理解を射程に入れた新しい英語教育のプロジェクトの一環に位置づけることができる。今後さらにこういった分野の開拓が進み、英語技能だけでなく高い学術性・専門性を兼ね備えた学生を育成するような教授法が開発されていくことを期待したい。

付録 1

Chapter	概念メタファー	例
1	TIME IS MONEY	<ul style="list-style-type: none"> · That mistake <i>cost</i> me a lot of time. · Do computers help us <i>save</i> time?
2	THINKING IS MOVING	<ul style="list-style-type: none"> · He always <i>jumps to</i> conclusions. · The lecturer <i>went step by step</i>.
3	TIME IS SPACE STATES ARE LOCATIONS	<ul style="list-style-type: none"> · My assignment is <i>over</i> due. · I am <i>in</i> a bad mood today.
4	KNOWING IS SEEING	<ul style="list-style-type: none"> · His ideas are pretty <i>transparent</i>. · You need to <i>clarify</i> your main point in this essay better.
5	SEEING IS TOUCHING	<ul style="list-style-type: none"> · Her <i>eyes</i> came to <i>rest on</i> the chocolate cake. · The children's <i>eyes</i> were <i>glued to</i> the television set.
6	LIFE IS A JOURNEY	<ul style="list-style-type: none"> · We'll cross that <i>bridge</i> when we come to it. · It should be <i>smooth sailing</i> from here on out.
7	A LIFETIME IS A DAY	<ul style="list-style-type: none"> · The man is entering his <i>twilight</i> years.
8	LIFE IS A GAME	<ul style="list-style-type: none"> · He is a real <i>loser</i>. · He didn't even get to <i>first base</i> with his argument.
9	IDEAS ARE OBJECTS; COMMUNICATION IS SENDING	<ul style="list-style-type: none"> · She <i>stole</i> my idea. · <i>Put</i> more meaning <i>into</i> your sentences.
10	IDEAS ARE FOOD	<ul style="list-style-type: none"> · She gave time for the thought to be <i>digested</i>. · Who <i>cooked up</i> the wild plan?
11	A ZONE OF INTERACTION	<ul style="list-style-type: none"> · The lights are <i>out</i>. · The stars are <i>out</i>.
12	LOVE IS A JOURNEY	<ul style="list-style-type: none"> · Their relationship is <i>on a dead-end street</i>. · My girlfriend and I have arrived at <i>a crossroads</i>.
13	LOVE IS MAGIC; LOVE IS MADNESS	<ul style="list-style-type: none"> · She is <i>charming</i>. · I am <i>crazy</i> about her.
14	MORALITY IS ACCOUNTING	<ul style="list-style-type: none"> · How can I ever <i>repay</i> you? · I am deeply <i>indebted</i> to you.
15	ANGER IS FIRE ; THE BODY IS THE CONTAINER FOR THE EMOTIONS	<ul style="list-style-type: none"> · He <i>burns</i> me <i>up</i>. · She is <i>full of</i> anger.
16	ANGER IS AN OPPONENT; ANGER IS A DANGEROUS ANIMAL	<ul style="list-style-type: none"> · He was <i>struggling with</i> his anger · He <i>roared</i> in anger.
17	NEGOTIATIONS ARE A JOURNEY; INTERNATIONAL RELATIONS ARE HUMAN RELATIONS	<ul style="list-style-type: none"> · US is <i>walking a tightrope</i>. · Japan and America are important <i>trading partners</i>.
18	NATION IS A PATIENT NATION IS A VEHICLE	<ul style="list-style-type: none"> · They <i>nurse</i> the country back to health. · The President <i>steered</i> the country <i>away</i> from danger.
19	VICTORIES ARE OBJECTS VICTORY IS UP	<ul style="list-style-type: none"> · Ichiro <i>bags</i> 3rd MVP. · Giants <i>climb into</i> 1st place.
20	SPORTS ARE JOURNEYS SPORTS ARE WAR	<ul style="list-style-type: none"> · <i>The road to</i> the super bowl · Yankees <i>gun down</i> Giants

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1978). *Politeness*. Cambridge University Press.
- 江川泰一郎 (1991) 英文法概説 (改定三版). 金子書房.
- Hinds, J. (1986). *Situation vs. person focus*. くろしお出版.
- 堀素子 (2006a) ポライトネスと英語教育. ひつじ書房.
- 堀素子 (2006b) ポライトネスを考える: 授業での試み. 第45回 JACET 全国大会発表レジュメ, 関西外国語大学 (2006, 9/8-10).
- 池上嘉彦 (1981) 「する」と「なる」の言語学. 大修館書店.
- 池上嘉彦 (2006) 英語の感覚・日本語の感覚. 日本放送出版協会.
- Kövecses, Z. (2005). *Metaphor in culture*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago University Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh*. Basic Books.
- 巻下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 文化と発想とレトリック. 研究社.
- Robinson, P. (1995). Attention, memory, and the “noticing” hypothesis. *Language Learning*, 45, 283-331.
- 瀬戸賢一 (1995) メタファー思考. 講談社.
- Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11, 129-158.
- Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning: A tutorial on the role of attention and awareness in learning. In R. Schmidt (Ed.), *Attention and awareness in foreign language learning* (pp. 1-63). Honolulu: University of Hawaii.
- 山梨正明 (1988) 比喩と理解. 東京大学出版会.

教材

- McCagg, P. (1997). *Speaking Metaphorically*. Kenkyusha